

VII 特別寄稿

米原氏について

藤岡大拙

1. はじめに

中世における米原氏については、史料不足のためほとんど明らかにすることができない。ただ、永禄から元亀（1558～1572）にかけて高瀬城主として尼子毛利の合戦に参加して、複雑な動きをみせる米原綱寛に関しては、若干の文書や文献が残存しているので、これらの史料を使って綱寛の行動を追跡する作業が、斐川町史などでなされている^①。しかし、綱寛以前の米原氏、或いは綱寛と同時代の一族の動向、米原氏の本領、出雲移住の時期などの問題については、従来全く手がけられていない。本稿はそうした不明部分にいささか考察の焦点を当てようとする試みである。従って、綱寛に関して述べることは避けたいが、論を進める必要から、彼の概略にふれておきたい。

綱寛は少年のころ、尼子晴久の寵童であったといわれる。その彼は、晴久の没した直後、つまり永禄5年（1562）、毛利元就が出雲に侵入するや、尼子との主従関係を絶って、毛利の麾下に走った。このとき、綱寛と同じように毛利方に走った武士もかなりいたのであるが、元就による本城常光誅殺事件が起ると、不安を抱いて尼子方に復帰するものが多かった。そんな中で綱寛は、三沢・三刀屋・赤穴など出雲最強の国人領主たちと同じように、毛利の麾下にとどまったのである。綱寛が毛利方になったのは、聖護院道増の説得によるといわれるが、軍記物の記述である点信憑性が問題である。

綱寛は毛利軍の富田城攻撃に積極的に参戦し、永禄9年（1566）11月尼子氏が滅亡すると、引き続き毛利の一軍として九州立花の陣に加わった。しかるに永禄12年6月、山中幸盛らが尼子勝久を擁して出雲に反撃を試みるや、これに呼応して尼子方に復帰し、以後元亀2年（1571）3月高瀬城落城まで、数少ない尼子残党軍として、徹底抗戦を行った。高瀬落城後、勝久の籠る新山城に逃れたが、新山もまもなく落城したので、上洛して出家隠棲し、一切の世事から隔絶したといわれる。彼の生没年は諸説があって明らかでない。

綱寛の嫡子平左衛門綱俊は、因幡鹿野において亀井政矩に仕え、その子綱貞は政矩の津和野転封に従い、津和野藩では家老職を勤めて500石を食んだ。綱貞を津和野米原の初代とし、10代綱善のとき維新を迎えた。

上述のように、綱寛とそれ以後近世の米原氏については、ある程度の輪郭は判明するのであるが、綱寛以前についてはほとんど手がかりとなる史料がない。

この系図を摘記すると次のようになる。

佐々木

六角

米原祖
 定頼 — 治綱 — 綱広 — 綱寛 — 綱俊 — 綱貞 — 綱道 — 綱利 (以下略)
 号米原志摩守 米原志摩守 米原平内兵衛 平左衛門
 綱忠 女子 女子 某
 米原右馬允

世系の治綱の項の側注には次のように記されている。

つまり、治綱は六角定頼の甥であったが、いかなる理由でか定頼の養子となり、近江坂田郡米原邑を領し、その地名を名のって米原氏を称した。のち尼子経久に属して軍功を樹て、出雲に移住したというのである。だが、この記述にはかなりの疑問がある。以下そのことを列記してみよう。

- 23 –

した米原氏の総帥は綱広であった^②。綱広を世系通りに治綱の子とすれば、綱広は10歳前後の子供ということになって、いかにも不自然である。

- (3) 坂田郡米原邑を領して米原の姓を称したとすれば、「よねはら」ではなく「まいばら」と呼ばれるべきである。しかし、現在米原氏の後裔と称する人々の姓は、いずれも「よねはら」といっている。米原は初めから「よねはら」であったのか、途中で「まいばら」から「よねはら」に変わったのか、容易に決めがたい。従って、米原氏の本貫を^{よねはら}米原邑だと断定することは早計である。
- (4) 六角定頼が江北の地米原を自由に宰領することができたかどうか疑問だが、それはさておき、治綱がもし米原邑を領し、米原氏の祖となったとすれば、その時期は定頼の年齢から考えて大永から天文(1521~1554)にかけての頃でなければならない。つまりその頃米原という姓が誕生したことになる。ところが明德記によると、明德の乱(1391)のとき、山名満幸の麾下に加わり、佐々木高詮勢と戦って玉碎した土屋党の中に、米原平九郎・米原平五なる武士の名が見える^③。彼らを「よねはら」と呼んだのか、又、彼らの出自が坂田郡米原であったのか、それを語る史料はないが、坂田郡誌にも、^{ふとお}太尾山城(坂田郡米原町太尾山)の城主について、「明德の乱時に米原平五、応仁・文明の乱に米原平内四郎が在城したと伝える」と述べている。しかし史料裏付けについては何も記していない。なお、文明3年(1471)には宮脇道秀が城主となっているから、米原氏が城主だったとすれば、それ以前でなければならない。
- (5) 東大史料編纂所架蔵の米原家文書の中に、康正元年(1455)米原長門守勝吉の寄進状がある。
- 以上(1)~(5)までの考察から、米原氏の成立は、少なくとも応仁の乱以前であることは間違いない。かく考えると、治綱の存在はきわめて疑わしいものになる。恐らく六角系図と米原系図を結びつけるための人物として、作りあげられた架空の人物ではなかろうか。もしそうであるなら、米原氏が六角氏の支流であることも否定されなければならない。
- (6) 米原氏の本貫地を近江坂田郡米原にするには、史料的証明が不足する。米原の地名が近世以前に存在していたかどうか今のところ明らかでない。しかし、そうかといって出雲にも米原の地名がないのだから、米原氏を三沢・三刀屋・赤穴・牛尾などのような出雲生えぬきの国人領主と見ることはできない。やはり他国から移住してきた武士と考えるべきであろう。その場合、近江国から移住したと考えるのがもっとも妥当だろう。
- (7) その移住の時期について、世系の注では尼子経久に属して軍功を樹て、のち出雲に移住

したとある。経久が活躍するのは永正から天文初年（16世紀前半）にかけてである。世系によれば、この時期に出雲に移住したことになる。果してそうか。

移住の時期を考える上で、次に示す米原家文書^④は重要である。

神門郡知行宮大明神御神領之事、新寄進共二百式拾貫前之儀預ケ遣之候、全有裁判、社役等無懈怠可相勤之者也 仍如件

康正元年^{乙亥}霜月十三日 米原長門守 勝吉（花押）

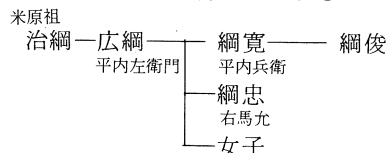
大神主民部大夫殿

この文書は出雲における米原氏の初見文書である。神門郡知井宮大明神に対する預ケ状である。かかる預ケ状は守護クラスが発給するものであるが、のちには小領主層がその領域内において発給する場合もあった。とすれば、米原勝吉は康正元年（1455）の時点で、神門郡においてかなりの権限をもっていたものと思われる。恐らくこのころまでには近江から出雲へ本拠を移していたのではあるまいか。従って、尼子経久が出現する以前、つまり京極氏の守護領国制が、それなりに安定していたころ、米原氏が移住してきたのではなかろうか。

- (8) 米原氏は移住してきて、どこに定着したか明らかでない。しかし、恐らく本領は高瀬山の北麓、出東郡の羽根、武部あたりの地を領し、高瀬城の構築にあたったものと思われる。従って高瀬城は、米原氏の入国以後に築城されたものと思われる。

3. 世系図にあらわれない人物

出雲における米原氏の文書上の初見は、康正元年の米原勝吉であるが、それ以後、系図に載っていない米原姓の人物が、古文書や古文献の中になんか見える。彼らを系図上のどこに位置づけるかは将来の課題であるが、一応ひろい出して列記してみたい。なお便宜上、米原世系の関係部分を再記しておきたい。



(1) 米原長門守勝吉

前述のごとく康正元年（1455）の米原家文書に見える。

(2) 米原山城守

大永7年（1527）7月、尼子軍は備後に遠征し、三谷郡和知（三次市）において毛利

軍と戦ったが、このとき毛利の重臣志道大蔵少輔広良は米原山城守を討取って、元就より感状をもらっている^⑤。米原山城守は尼子軍の中でも有力武将であったようだ。

(3) 米原小平内

天文元年（1532）の塩冶興久の乱にあたって、興久の執事として初めは主君を諫めるが、いったん乱が勃発するや、興久のために戦って戦死する人物。雲陽軍実記や陰徳太平記では英雄的に描かれている。古文書には出てこないため、いまひとつ信用性がないが、一応米原平内左衛門綱広の弟に比定される。

(4) 米原左馬亮

天文9年8月19日付けの竹生島造宮奉加帳によると、尼子家臣の奉加者117人の中に、米原左馬亮なる人物がいる^⑥。年代的に米原平内左衛門綱広の兄弟か。

(5) 米原讃岐守

天文13年（1544）7月、備後国布野合戦のとき、尼子方の先陣の中に、牛尾遠江守幸清、河副美作守、平野又右衛門などとともに、米原讃岐守の名が見える^⑦。

(6) 米原新五兵衛

天文15年4月20日牛尾幸清は直江郷内の20俵尻の土地を、30貫で鰐淵寺に売却しているが、この地はもともと幸清が米原新五兵衛から買得したものであった^⑧。

(7) 米原左馬允

天文21年（1552）5月、尼子晴久は備後に進出して毛利軍と泉（比婆郡口和町向泉）で合戦を行った。このとき尼子誠久の麾下にいた米原左馬允は勇戦したが、佐久木新右衛門のために射られ、戦死した^⑨。

(8) 米原東市正綱正、同右衛門尉

いずれも福屋隆兼の与党であるが、永禄2年（1559）冬、石見国矢上城攻防戦に敗れ、毛利方に降った^⑩。

(9) 米原右馬允

米原家文書の中に関係文書が5通残っているが、この人物だけは世系図に見え、綱寛の弟右馬允綱忠である。右馬允は兄綱寛が毛利方に寝返ったのちも、尼子方にふみとどまっていた。尼子義久も引きとめに配慮している。

今度為始平内兵衛、同名之者共雖敵同意候、其之儀、從最前別而入魂之段神妙候、然間出東郡之内近年平内兵衛尉相拘候吉成・神森之儀、為給地宛行候、弥奉公可為肝要候、如件

永禄六

三月一日

義久（判）

米原右馬允殿

綱寛が近年拘えていた吉成・神森（守）（いずれも斐川町内）の地が綱忠に給与されているが、これらは米原氏の本領の一部ではなかろうか。

(10) 米原助四郎

永禄9年（1566）11月富田城は落城したが、籠城していた軍勢の中に米原助四郎の名が見える⁽¹¹⁾。なお、助四郎は天正6年（1578）上月城にも籠城している⁽¹²⁾。

(11) 米原三郎右衛門尉

佐々木文書「永禄九年十一月二十八日雲州富田下城迄相届衆中次第不同」によると、最後までふみとどまった城内の武士114人の中に、「米原三郎右衛門尉^{入衆之時富田にて討死}」との記載がある。すなわち米原三郎右衛門尉は永禄12年勝久らが出雲に反撃し、富田城を攻撃したとき討死したとあるから、(10)米原助四郎と同一人物ではない。なお(9)米原右馬允の名がこの佐々木文書に見えないのは不思議である。あるいは右馬允と三郎右衛門尉は同一人物であろうか。

(一)

(12) 米原与市兵衛、同四郎兵衛

元亀元年（1570）秋ごろ、籠城中の高瀬城から、与市兵衛・四郎兵衛らがうって出て、平田手崎城を攻撃したが、手崎城からも岡元良が迎えうって、しばしば合戦が行われた⁽¹³⁾。なお与市兵衛はのち吉川氏の軍勢として伊勢安濃津城攻撃に従軍、戦死している⁽¹⁴⁾。与市兵衛の後裔は岩国藩に移った。

(13) 米原又次郎

米原与市兵衛と岡元良の合戦に加わったが、元亀1年10月14日元良の息某によって討ちとられた⁽¹⁵⁾。

以上のように、古文書や軍記物の中に、ほぼ同一時期において、多数の米原姓の武士を見出すことができる。彼らを系図の中へそれぞれ位置づけることは、今の時点ではむずかしいが、いずれにせよ一族がかなり繁衍していたものと考えてよからう。

4. 尼子家臣団における米原氏の位置

米原綱寛が毛利に走る以前、つまり尼子晴久体制下において、米原氏は家臣団内部においてどのような位置にあったろうか。このことを推測する手がかりとして、次の3つの史料をあげることができる。

(1) 竹生島造宮奉加帳

これは天文9年8月19日の日付けをもつ文書であるが、竹生島宝厳寺造宮のため、自尊上人が勧進にやってきたとき、尼子晴久は出雲国内の諸将に奉加を命じた。そのとき奉加帳に名を連ねたのは一族・家臣117名に及んだ。この奉加帳をみると、御一族衆、出雲州衆、富田衆などに分けて記載している。出雲州衆は三沢・三刀屋・牛尾など68名が載っているが、今岡典和氏は奉加帳を分析して、出雲州衆とは「その多くが鎌倉・南北朝期から史料上に現われる出雲生えぬきの有力国人層」だとしている^⑬。

富田衆は37人が記載されているが、これについて今岡氏は「室町期以前の史料には殆ど表われず、戦国期になって頻出するに至る家柄が多数を占める」とされ、彼らは尼子の奉行人となったり、国内の有力社寺や他の戦国大名、更には中央諸権門と連絡にたずさわるなど、「尼子氏の領国支配の権能は彼らによって担われていた」と述べている^⑭。

この富田衆の中に米原左馬亮がいる。左馬亮については、世系図の上で見出すことができないが、いずれにせよ米原氏が土着の国人層ではなく、尼子の直臣団の一員であったことを示している。

(2) 尼子分限帳

尼子家臣団の個々について、役柄と給知石高がのっている^⑮。この文書は記載に不合理な点があって、史料として信用できない面もあるが、それでも尼子晴久時代の家臣団構成を知る上で参考となるといわれている。記載順に摘記すると

御家老衆 宇山飛騨守ら4人

御一門衆 尼子下野守ら5人

中老衆 山中幸盛ら7人

御手廻衆 平野又左衛門、米原平内左衛門、本田豊前守、佐世勘兵衛、佐世助四郎、牛尾太郎左衛門、横道源介、横尾源之允、三刀屋蔵人の9人

以下侍大将衆(42人)、足輕大将衆(3人)、惣押大将衆(6人)、軍奉行(4人)、惣侍衆(27人)の順となる。

御手廻衆の内容は明らかでないが、分限帳の順序からみて米原氏が家臣団構成の中で、かなり重要ランクに位置づけられているのはまちがいない。

(3) 出雲十旗

これは雲陽軍実記に初見する言葉で、「惣而尼子旗下にて、祿の第一は白鹿、第二は三沢、第三は三刀屋、第四は赤穴、第五は牛尾、第六高瀬、第七神西、第八熊野、第九真木、第十

大西也、是を出雲一国の十旗と云」とある。この出雲十旗のランク付けが、何を意味するか、いま一つあきらかでない。例えば城主の禄高の大きさ順なのか、月山富田城防衛体制上の重要さの順位なのか。恐らく両方の要素をもっていたのであろう。注意すべきは、高瀬城主の米原氏以外は、すべて有力国人領主であるということだ。米原氏だけが富田衆である。

以上3つの史料から考えてみると、米原氏が複雑な位置にある武士だったことがわかる。すなわち米原氏は出雲生えぬきの国人領主ではなく、直臣的な富田衆の一員であった。しかし、富田衆の中でも、尼子氏の譜代的家臣ではなくむしろ尼子氏と同じころ近江から入部した同輩の立場にあり、尼子奉行人にも任じられなかった。その意味で富田衆でありながら出雲州衆にも近い側面があった。このことが平内兵衛綱寛の行動を極めて複雑なものにしたと思われる。

最後に米原氏の所領にふれておきたい。

出雲十旗の第6位にランクされているところから、米原氏の所領がかなり豊かなものであったことが想像される。綱寛が永禄12年尼子勝久のもとへ復帰したとき、勝久は次の所領所職を与えて忠誠を賞した¹⁹⁾。

就此方現形、申付知之事

1 当知行分之事

(実)

1 完道当領知之事

1 加茂七百貫之事

1 平田三百貫之事

(威力)

1 安成千貫之事

1 原手三郡奉行之事

已上

右分可領知候、弥忠儀専用候 恐々謹言

(永禄12年)

8月12日

(尼子)

勝久(花押)

米原平内兵衛尉殿

進之候

このような所領所職をもらっても、現実には勝久が出雲大半をおさえていたわけではないから、空手形に近いものであったろう。ただ、当知行分と実道当領知は綱寛が従前から領有していた所領であったに違いない。当知行分は恐らく米原氏の本領であろう。それが何処であるか明らかでないが、前掲の米原右馬允にあてた尼子義久の宛行状によると、「近年平内兵

衛尉相构候吉成・神森之儀」とあれば、綱寛の本領の一部に吉成・神守があった。しかしそれは比較的新しく入手したもので、根本所領とでもいうべきものは、やはり高瀬城麓でなければならぬだろう。

ところで、天野隆重の四男雅楽允元友は、永禄12年12月2日元就・輝元連署をもって氷室百貫、波根・竹辺百貫の地を宛行われているが、^⑩これは恐らく毛利氏が、綱寛の謀叛によって没収した土地を、元友に与えたものではなかろうか。波根（羽根）・竹辺（武部）は斐川町の旧荘原村にあり、高瀬城の西北麓にあたる。もしこの推定が許されるなら、綱寛の本領は波根・竹辺百貫、氷室百貫、吉成、神守といった高瀬城の西北山麓一帯に東西に拡がるかなりの土地であったと思われる。

5. おわりに

以上きわめてあいまいな所論になった。とくに史料不足から陰徳太平記などの軍記物を十分な史料批判を加えないで利用したことはかなり問題であろう。しかし、今までほとんどとりあげられなかった米原氏について、特にその特異性についていささかでも光をあてることができたとすれば、本稿作成の使命の一部は果し得たことになるだろう。ご批判をたまわりたいものである。

- ① 斐川町史のほかに、朝山皓「新山城を中心とする山中幸盛の活動」（谷口廻瀾編著『山中鹿介』所収）池田敏雄「高瀬城と米原氏」（斐川町誌調査報告第4集）などがある。
- ② 陰徳太平記には米原平内兵衛広綱となっているが、これは綱広の誤りと考えられている。
- ③ 岩波文庫本『明德記』65ページ
- ④ 東大史料編纂所所蔵。この文書は京大大学院生今岡典和氏のご教示による。記して謝意を表したい。
- ⑤ 萩藩閥閥録巻16 志道家文書4号
- ⑥ 竹生島宝厳寺文書
- ⑦ 陰徳太平記巻14 備後国府野合戦之事
- ⑧ 鰐淵寺文書 牛尾幸清売渡状
- ⑨ 陰徳太平記巻21 備後国泉合戦之事
- ⑩ 上 全 巻33 中村城没落之事
- ⑪ 上 全 巻40 義久兄弟芸州下向之事

雲陽軍実記 兄弟尼子和睦芸州下向

- ⑫ 上 全 木下藤吉郎秀吉播州上月城加勢並勝久氏久生害事
- ⑬ 上 全 熊野城高佐城明渡並平田手崎城軍高瀬城兵糧之事
陰徳太平記 卷4 7 平田城並所々合戦之事
- ⑭ 米原新三郎文書（岩国藩中諸家古文書纂4所収）
- ⑮ 萩閥卷8 0 岡家文書1 1
- ⑯ 今岡「戦国大名尼子氏家臣団に関する一考察」山陰史談1 9号
- ⑰ 上全論文
- ⑱ 島根県史第8巻所収
- ⑲ 津和野米原家旧蔵文書
- ⑳ 萩閥9 2 天野九郎右衛門文書